

◆大相撲よもやま話◆

平成に活躍したご当所力士 琴奨菊の軌跡

迫力満点のガブリ寄りを武器に活躍した琴奨菊。朝青龍や白鵬らに対抗し、日本出身力士10年ぶりの優勝も果たした人気大関だった。

福岡県柳川市出身で、本名は菊次一弘。相撲好きの祖父が自宅の庭につくった土俵で小3の頃から汗を流し、週3回、久留米市の井上道場でも稽古に励んだ。小学校を卒業すると、実家を離れて高知・明徳義塾中・高へ相撲留学。中3で中学横綱、高2で国体少年の部を制すなどの実績を残す。

高校卒業後、佐渡ケ嶽部屋に入門。平成14年1月場所、琴菊次の四股名で初土俵を踏んだ。中学時代からのライバルで同期生の梶原、のちの関脇豊ノ島と競って出世の階段を駆け上がり、幕下時代の平成16年1月場所に琴奨菊と改名以降、3場所連続勝ち越しで、平成16年七月場所で新十両、平成17年一月場所で新入幕。1場所で陥落したが、三月場所、13勝2敗で十両優勝を手土産に1場所で復帰を果たすと、以後は幕内に定着する。

東前頭二枚目で迎えたご当所の平成18年十一月場所十四日目、巨漢の把瑠都(のち大関)を相手に素早くモロ差しになると、腰を落とし、波が寄せるように何度もあおって出て快勝。「稽古場でもやったことがなかった」という「ガブリ寄り」を、以降、代名詞といえる大きな武器とした。この場所、10勝5敗で初の三賞となる技能賞を獲得し、平成19年三月場所で新関脇。小結で迎えたご当所の平成19年十一月場所初日、優勝した横綱白鵬を8度目の対戦で破り、9勝6敗で2回目の技能賞。関脇で迎えた平成20年三月場所には優勝した横綱朝青龍を8度目の対戦で初めて破って初の殊勲賞。以降は三役の常連となり、稀勢の里らとともに次の大関候補として注目された。

関脇で迎えた平成23年一月場所、白鵬らと優勝を争い、幕内では初めて11勝して3回目の技能賞に輝くと、五月場所は10勝、七月場所は十一日目に全勝の白鵬に土をつけて11勝。九月場所は十三日目に1敗で単独首位の白鵬を撃破。千秋楽まで2敗を守って優勝を争い、12勝3敗の好成績で、堂々の大関昇進を果たした。

それから2年後の平成25年十一月場所二日目、大きな試練に見舞われた。松鳳山を押し出した際に右大胸筋断裂の重傷。以降、得意の左四つからの寄りで必要な、右から相手の左を抱え込む力が入らず、思うような相撲が取れなくなった。しかし、あきらめずに工夫と努力を重ね、右四つへのモデルチェンジに成功。さらに、平常心を保つためのルーティンとして、制限時間いっぱいで塩を取りにいく際に、背中を大きく後ろに反らせる動きを取り入れた。後に、フィギュアスケートのイナバウアーに因んで「琴バウアー」と命名されたこの動作は、ガブリ寄りと並ぶ琴奨菊の代名詞となった。

そんな努力が報われ、大きな花を咲かせたのが平成28年一月場所。初日から得意のガブリ寄りが冴え、全勝街道を突き進む。十日目からは鶴竜、白鵬、日馬富士と3横綱を撃破した。十三日目にライバル豊ノ島に屈したが、残り2日間を勝ち、悲願の初優勝を達成。日本出身力士としては平成18年一月場所の大関栃東以来10年ぶりの優勝に、日本中が沸き立った。場所後には、祐未夫人と挙式。水郷の町として知られる故郷柳川での水上祝勝パレードに、夫婦そろって参加し、笑顔を見せた。

その後は、平成29年一月場所を最後に大関から陥落後も誠実に土俵を務め、同年九月場所で日馬富士から初金星を獲得。十両に陥落した令和2年十一月場所中に引退するまで、相撲への飽くなき探求心はいささかも衰えることはなかった。令和4年10月にはコロナ禍で延期になっていた断髪式も行い、佐渡ケ嶽部屋付きの秀ノ山親方として、第二の琴奨菊を育てるべく、後進の指導にあたっている。


相撲への探求心を失わず、得意のガブリ寄りに磨きをかけて活躍した琴奨菊



























SUMO PRIME TIME

大相撲アーカイブ場所

思い出の土俵がYouTubeで甦る
月額990円(税込)で懐かしの映像が見放題!!

なとり
おつまみビーフ


鈴廣かまぼこ
小田原市風祭（一四五）一四三四
紀文


おつまみ
なとり チーズ鱈®
紀文


◆十一月場所の優勝力士◆◆◆

花籠部屋勢の連携で、鮮やかな逆転優勝

魁傑（西張出小結　12勝3敗）

昭和49年十一月場所優勝

戦後初の福岡での本場所となった昭和32年十一月場所以来、17年にわたり熱戦が繰り広げられた天神の福岡スポーツセンターに別れを告げ、薬院の九電記念体育館へ会場を移して行われた昭和49年十一月場所、大方の予想は「輪島の3連覇か、北の湖の横綱初優勝か」だった。

北の湖はこの年一月場所、関脇で初優勝して大関に昇進。大関2場所目の五月場所でも優勝し、七月場所は優勝同点で、場所後に史上最年少の21歳2カ月で横綱に昇進。角界を背負う大横綱への期待が高まっていた。

そんな北の湖に大きな壁として立ちはだかっていたのが、先輩横綱の輪島だ。七月場所は、1敗で単独首位の北の湖と1差で迎えた千秋楽、本割、決定戦といずれも下手投げで裏返しにして逆転優勝。九月場所も新横綱北の湖との争いを制して2連覇を果たしていた。

この年、ここまでの5場所で輪島が優勝3回、北の湖が優勝2回。一年納めの十一月場所でも両横綱の一騎打ちとみられた優勝争いは、意外な展開となった。東横綱輪島が、中盤にまさかの3連敗。九日目までに4敗を喫し、早々に脱落したのだ。こうなれば本命は西横綱北の湖。この時点ですでに2敗を喫し、首位とはいえ東大関貴ノ花、西小結若三杉、西張出小結魁傑、東前頭八枚目金城、西前頭十枚目福の花の5人に並ばれていたものの、ライバルたちは日を追うごとに1人、また1人と脱落し、千秋楽を迎えた時点では北の湖が2敗で単独首位に立っていた。

3敗で追う2人のうち、若三杉は東関脇大受に敗れて優勝の可能性が消えたものの、魁傑は福の花に勝って望みをつなぐ。そして、結びの一番、勝てば優勝という北の湖に、またも輪島が立ちはだかった。この場所はここまで8勝6敗と不振の輪島だが、この一番には奮い立つ理由があった。3敗を守って決定戦の望みをつないだ魁傑は同じ花籠部屋。援護射撃をとの思いを力に変えた輪島は北の湖を翻弄し、切り返しで勝利する。優勝の行方は、北の湖と魁傑、3敗同士の決定戦にもつれこんだ。

こうなると、勢いに乗る魁傑が有利。しかも、両者はこの場所、七日目に顔が合い、魁傑が北の湖を上手投げで破っている。決定戦では北の湖の突っ張りを魁傑が冷静にあてがって突き返し、引きに乗じて突き出す会心の相撲で初優勝を飾った。優勝パレードの助手席には、援護射撃を果たして旗手を務める輪島の姿があった。

魁傑はこの時、日大柔道部を中退しての入門から約8年後の26歳。幕内4場所目の昭和47年三月場所、12勝3敗で長谷川との決定戦に進出して注目され、三役に定着。大関候補といわれながらあと一歩の壁を破れず、輪島、貴ノ花、北の湖に先を越されていた。直前の九月場所は東張出関脇で7勝8敗。西張出小結で迎えた十一月場所も滑り出しは1勝2敗と芳しくなかったが、七日目に北の湖を破って波に乗った。2敗で首位を並走し続けて迎えた十四日目は、重圧に耐えかねて東前頭九枚目大鷲の小手投げに屈し、一歩後退したが、千秋楽は立ち直り、同僚・輪島の援護も受けての、鮮やかな逆転優勝だった。殻を破った魁傑は、翌場所の昭和50年一月場所も11勝4敗の好成績で、場所後に念願の大関に昇進する。

対照的に、悔しい思いをした北の湖。じつは九月場所でも、1敗で単独首位の横綱輪島を1差で追っていた十四日目、輪島と同じ花籠部屋の龍虎に不覚を取って優勝を逃していた。2場所連続で花籠部屋勢の連携の前に苦杯を嘗めた北の湖だが、この悔しさをバネに昭和50年一月場所では念願の横綱初優勝を果たし、大横綱への階段を一歩ずつ上っていくことになる。


優勝決定戦で北の湖を突き出した魁傑


初優勝を果たした魁傑の優勝パレード。旗手は見事な援護射撃を見せた同じ花籠部屋の輪島

◆大相撲「モノ」語り◆◆◆

軍配

勝負がついた際、行司が勝った力士の方屋（東方または西方）にあげる軍配は、もともと中国風の団扇である唐団扇を、戦国時代に武将が軍を指揮する際に使ったもので、「軍配団扇」や「団扇」ともいわれる。江戸時代初期の相撲を描いた絵にもしばしば見られ、当時から広く用いられていたことがうかがえる。

材料はけやき、檜、紫壇などで、幕下格以下の行司は木目のもの、十両格以上の行司は漆を塗ったものが一般的だ。形はひょうたん形とたまご形があるが、現在はほとんどがたまご形。柄の部分につける房の長さは約3.6メートル。房の色は行司の格によって異なり、立行司木村庄之助は総紫、式守伊之助は紫白、三役格は朱、幕内格は紅白、十両格は青白、幕下格以下は黒又は青となる。

昇進のお祝いなどで師匠や後援者などから新たな軍配を贈られるほか、長年使ってきた軍配に、新たに銀細工などを施すこともある。絵柄に決まりはなく、家紋や縁起の良い図柄が描かれたり、漢詩が書かれることもある。木村庄之助や式守伊之助など、由緒ある行司には代々受け継がれる軍配があり、「譲団扇」と呼ばれる。



木村庄之助の譲団扇。天保年間から150年以上、受け継がれている。「知進知退 随時出處」は「進むを知って、退くを知る、いつでもどこでも」という意味。









本日の取組の
進行状況もわかります!
日本相撲協会公式アプリ